

# 旅愁

## 映画文学人生論

原作：横光利一（1937-46）

『東京日々新聞』 『大阪毎日新聞』

参考：横光利一『上海』（1928-31）「改造」

参考：前田愛『上海』論 筑摩書房

関川夏央『東と西 横光利一の旅愁』（2012）講談社

とにかく、あれは世界戦争の始まりだよ。  
もう 戦争は起こっている。

横光利一の『上海』と『旅愁』を戦争文学あるいは戦争前夜の文学として読んでみた。

『上海』は五・三〇事件が勃発した大正十四年（一九二五年）の植民地都市上海、『旅愁』の前編はスペイン内戦の影響で欧州大戦再発が懸念される昭和十一年の（一九三六年）国際都市パリ、後編は日中戦争がはじまった昭和十二年（一九三七年）前後の日本を舞台としている。

この時代の日本には言論の自由はない。小林多喜二の『一九二八年三月十五日』や『蟹工船』は発売禁止処分を受け、徳永直は転向して、『太陽のない街』を絶版宣言をしている。プロレタリア文学と対立するモダニズムの文学者横光利一は愛国者の立場をとっていたので、発禁の憂き目を見るおそれはなかったとはいえ、油断はできない。筆禍を招かない文章表現を心がける必要がある。

しかも、『旅愁』は昭和十二年頃の話でも、作者が執筆した時期は戦争が日本の敗北で終わった昭和二十年以後にまでずれこんだため、こんどは占領軍の検閲にひっかからないような表現を工夫しなければならなかった。

とはいえ、横光利一は新感覚派の天才と呼ばれた作家である。新感覚は庶民感覚ではない。庶民に理解されにくいというのが弱点だが、検閲官にも理解されにくいというのは長所だ。



## 旅愁——映画文学人生論

たとえば、蒋介石が西安で誘拐されたまま生死不明になったという新聞記事が話題になる。事件は中国のこととはいえ、主人公の矢代耕一郎は身に直接吹きつけて来た突風を覚え、これはいつかは自分の運命に影響して来る何事かだと思ってひやりとしたという。また、登場人物たちが次のような物騒な発言をする場面もある。

「どうも中国も危なくなっているね。スペイン内乱とは関係があるよ」

「とにかく、あれは世界戦争の始まりだよ。もう戦争は起こっている」

「これで世界歴史を通じて調べたものの云うことだと、二年間の平和を得るためには人間は二十四年間戦争をしていることになってるそうだよ。そうしてみると、平和というものは、実に宝だ。徳川時代は三百年の平和だが、そんなのは殆んどないといっているんじゃないか」

戦争文学の一種だと思うが、表面的には矢代耕一郎と宇佐美千鶴子との恋愛小説のかたちをとっている。二人は欧州向けの客船で知り合い、パリやチロルで交際し、日本へ帰ってから婚約した。千鶴子はカソリックの信者だ。古神道を心のよりどころとしている矢代は先祖がカソリックの太友宗麟によって滅ぼされたことにこだわりを感じている。結局、二人は結ばれそうもない。

蟻台上に餓えて月高し

横光利